

武蔵野日曜集会 聖霊降臨節祈禱会

讃美の生活

——ガラテヤ書第5章16～23節——

1991年5月26日

小池辰雄

御霊に在りて歩め 愛・喜び・平安 寛容・仁慈・善意 忠信・柔和・節制 讃美の生活 戦いの器 霊肉渾然一如

【ガラテヤ5】

¹⁶我いう、御霊によりて歩め、さらば肉の慾を遂げざるべし。¹⁷肉の望むところは御霊にさからい、御霊の望むところは肉にさからいて互いに相戻ればなり。これ汝らの欲する所をなし得ざらしめん為なり。……

²²然れど御霊の果は愛・喜び・平和、寛容・仁慈・善良、忠信・²³柔和・節制なり。斯るものを禁ずる律法はあらず。

●御霊に在りて歩め

¹⁶我いう、御霊によりて歩め、さらば肉の慾を遂げざるべし。¹⁷肉の望むところは御霊にさからい、御霊の望むところは肉にさからいて互いに相戻ればなり。これ汝らの欲する所をなし得ざらしめん為なり。

「御霊によりて」ではない、「御霊に在りて」です。「御霊に在りて歩め」ということ。肉の方の生活が19節にたくさん出ている。御霊に在るところの生活が22節からです。

²²然れど御霊の果は愛・喜び・平和、寛容・仁慈・善良、忠信・²³柔和・節制なり。

「善良」は「善意」と言った方がいい。これは律法じゃないですよ。御霊はおのずからこういうものを持っている。「果」と言ったって、何か原因と結果みたいに思うけれども、

「御霊が持っているものはこういうものだ、御霊の実存というのはこういうものだ」ということです。「御霊の果」という言い方をされると、御霊を持って、それから、こういうものが結果して表れるかと思うけれども、「御霊の内容は」ということです。

「御霊の持っている内容は、愛・喜び

平和じゃない、平安なんだ、

平安、寛容・情け・善意、忠信・柔和・節制なり」

ということですよ。



●愛・喜び・平安

これは面白いんです。「愛・喜び・平安」というのは、まず神さまとの関係が立っているところが、御霊なんです。

「神・キリスト・聖霊・我」

この四位一体の関係が、現実が、これが本当の大事な現実です。そんなことは、私は無教会では絶対に聞かなかった。ただ

「信仰、信仰。十字架で贖われた」

と、それだけでした。ところが、私は根源の現実が自分の中で無かったら、それは空しい。相対的現実みんなガタガタですよ。そんなものを問題にしてたきりがない。根源なんです。根源の現実^{たまわ}はみな賜りたる現実なんです。いいですか。

「私の中にあります」

とはつきり言える現実なんです。

「私の実存によつて、私の努力によつて、私の聖書勉強によつて」

なんていうんじゃない。神・キリストから直接に賜った現実、それを根源現実という。恵の現実です。

それは、「神・キリスト・聖霊・我」の四位一体なんです。「一体」というと、これはまるつきり聖人みたいに聖められているかという、そうじゃない。これ（我）は罪びとに過ぎない。罪びとを中に入れてしまう。中に入れたその門はどこかという、それは十字架なんだ。十字架という門を通じて、我々はこの中に入れられてしまつて、四位一体なんだ。そこが即ち、神・キリストの愛なんです。

だから、「御霊の果」じゃないんだ。パウロよりも一つ奥の世界を私は言っている。

「御霊が結果するものは愛だ」

なんて、普通はそう思うでしょ。そうすると、一種の新しい新約の律法みたいになる。パウロさんが、

「お前はそういう読み方をするか、その方が本当だな」

なんて言っているかも知れない。無条件の世界だから、私は確信をもつて言えるんです。もし、こちら側の実存によらなければならなかったら、そんなことは私は何も言えない。無条件なんだ。こっちはゼロなんだ、マイナスだつて何だつていい。

「あんたはプラスですか、マイナスですか、何%プラスで、何%マイナスですか」

と、そんなことではないんだ。私の気合がわかるですか、気合が。

そうしたら、この「愛」は神・キリストの愛なんです。

「聖霊の現実^{たまわ}は神・キリストの愛でござるぞ。そして、それは喜びだ。楽しくてしようがないんだ」

と。神・キリストの生命が来ているからさ。「永遠の生命」なんて、ただ時間的に永遠じゃ



ない。質的に滅びない生命が「永遠の生命」です。不滅の生命と言った方がいい。滅びない。「永遠」というと、時間に対する永遠かと思うと、そうじゃない。永遠とは現実において滅びないもの。それは喜びだ。ベートーヴェンの「歓喜」の第九シンフォニーは「喜びに寄す」(アンディフロイデ)というシラーの詩をあそこで歌っているわけだ。シラーもベートーヴェンもすごいけれども、もう一つその奥の世界。この喜びは何ものも奪うことができない喜びです。神・キリストの喜び。ダンテでもベートーヴェンでも、あの苦難を通して、

「歓喜だ。嬉しい」

と言っている。さすがはです、彼らは。「悲劇」と言わないで、

「喜曲(喜劇)は終わった」

と言った。ベートーヴェンもそう言った。

「フライデーター アミキ、コメディア フィニタ エスト」

「友達よ、歓喜してくれ、喜劇は終わった」

と言った。本当は、

「悲劇は終わった」

なんだよ、ベートーヴェンは、聾で聞こえない。さんざん苦しんだ。永遠の恋人にも会えなかった。

「汝は我がもの、我は汝のもの、我らは神のものである」

という恋文がある。地上では果たされない。悲劇ですよ、それを

「喜劇は終わった」

と言った。運命をとつ捕まえるようなことを言ったんだね、ベートーヴェンは。ベートーヴェンの音楽なんて、いい加減な気持ちで聞けはしない。一遍、ハイリゲンシュタットで自殺しようと思ったんだから。

この喜びは何ものも奪うことができない。この愛は天来の愛だから、最高最深の愛である。

「御霊の持っているものは、この愛であり、この喜びであり、この平安である」

というんです。絶対に「平和」じゃない。「平安」、神に於けるところの本当の安らかさです。この安らかさは力を持っている。ギデオンの士師記の6章のところが同じです。

私はパウロを乗り越えたことを言っているんですよ。「御霊の果」じゃない。だから、私に注解なんか書かせたつてダメなんだ。

●寛容・仁慈・善意

その次は、「寛容・仁慈・善意」。「寛容」とは大きな気持を持っていること。

「かくねむしよう
廓然無聖」

という、あの「無門関」の「廓然」というやつです。およそパリサイと反対なんです、この寛容というのは。全部、大きく入れてしまおう。ドイツ語でいうと、「グロースミューテッ



ヒカイト」、大きな心根です。包摂してしまう。

「ああ、そうかそうか」

と。白隠和尚がそういう気持を持っていたね。良寛もそうだ。何と言われようと、

「ああそうですか」

と、一つも責めない。同じ次元でもって争わない。「敵に勝つ」とは同じ次元で勝った負けたじゃない。次元の違ったところに自分がいるから、何と言われようと、

「ああ結構でございます。誤解されようが一向に差し支えありません」

と。これが「寛容」です。

「まあいいや、仕方がない。許してやろう」

なんてじゃないですよ、この「寛容」というのは。もつと大きな気持です。この空気が一切のものをこうやって包摂しているね。寛容の一番大きなのが、こういう見えない空気の姿だ。

次は「^{なさけ}仁慈」です。

「^{まった}汝らの父の全きが如く全かれ」

というのが、ルカ伝では

「父の情け深きが如く情け深くあれ」

という。「リーベ」でなくて、「バルムヘルツイヒカイト」というドイツ語になっている。仏教でいう「慈悲」「大慈大悲」だよ、この「情け」というのは。

次は、「善良」じゃない。「善良」なんていうと、何か性質が善良だと思う。「善良」というこの訳はダメだ。むしろ「善意」と訳した方がいい。相手に対して善意を持っている。ところが、善意が誤解されたりする。私は散々それを受けてきた。善意を悪意に取られたりね。

だから、これは人に対して言っているんです。

「寛容・仁慈・善意」

は対人関係の大きな気持です。それは第一の「愛・^{よろこび}喜悦・平安」があるから、これが自ずから出てくる。おのずから持っている。最初の三つが土台で、そして、後の三つが横に流れていく。最初の三つは縦の「神・キリスト・我」の関係。それが横に出ていく。「善きサマリヤ人^{びと}」みたいなものだ。

●忠信・柔和・節制

今度は、

「忠信・柔和・節制」

「忠信」は「信仰」「ピステイス」という字です。英語の「トゥルース」、ドイツ語の「トロイェ」にあたる。「信実」でもいい。「真実」の方は、自分の気持が真^{まこと}である方。「信実」は、



相手に対して裏切りをしないことです。相手が裏切ろうが、こっちは変わらない。それが本当の信実です。本当の友情というのはそうなんだよな。

「そうか、私がいろんなことを考えていたが、あいつは徹底的に私をそんなに信じてくれているのか」

と、相手が参ってしまう。

「柔和」という言葉は、非常に心の低いことと同じです、ヘブライ語でも。

「幸いなるかな柔和なる者、その人は地を嗣がん」

という。従順なことと同じなんです。羊が牧者に従って、穏やかに従っている姿が、この「柔和」です。「従順」と同じような内容を持った言葉です。心根が非常に柔和なんだね、穏やかなんだ。

それから、「節制」。これは、本当に中庸を——右にも左にもズレない、過ぎもしなければ足りなくもない——まことに中道をいくことを、「節制」という。だから、この終りの三つは、人間のその人の内的な世界のことをいっている。

不思議なんだ、このところは。「愛・喜び・平安」、「寛容・仁慈・善意」、「忠信（信仰）・柔和・節制」。これが聖霊の持っている内容である。聖霊の持っている性質ですね。「性質」というのもおかしいけれども、もちろん、聖霊は他に智慧もありますよ、力も持っていますよ。いろいろあります。聖霊の実存面はそういうこと。これは、ロマ書12章と、ある意味において相応する。12章の方が詳しいけれども、「霊の祭」と書いてある。

「されば兄弟よ、われ神のもろもろの慈悲によりて汝らに勧め、己が身を神の

喜びたもう潔き活ける供物として献げよ、これ霊の祭なり。」（ロマ12・1）

と。そして、3節から21節まで聖霊の実存の内容を、パウロが、素晴らしいことを書いている。

●讃美の生活

それで、「聖名の讃美」とか「讃美の生活」とかいう、「讃美」ということ。「讃美」とは素晴らしい言葉だね。漢字の熟語とはいいいものだな。讃美歌を歌うときに、本当にその歌詞の気持を——うまく歌うとか、まずく歌うとか、そういうことじゃない——心からそれを歌う。歌いながら、その境地に入っていなければ、本当は歌っているというわけじゃない。だから、歌いながら力がくる。歌いながら力が来なかったら、それは本当はその境地に入っていないということだ。

では、讃美の土台は何ですか。なぜ、讃美できるんですか。それは、今言った

「愛・歓喜・平安」

これが土台です。神の愛・歓喜・平安をいただいていること。そして、その中で何といつても、この「愛」が最大の言葉です。パウロがコリント前書13章で言っているとおり。愛



の内容は、十字架と聖霊です。贖いと聖霊。だから、聖霊即愛です。手島さんが『聖霊の愛』という本を書いた。私はあの時に、

「これは未だかつてない本だ」

と言った。誰も、教会も無教会も、それを本当に「そうだ」と言わない。卑怯なんだ。本ものをなぜ「そうだ」と言わないのか。手島さんと私は人間的にいろいろ違う。けれども、あるところの気合は本当に一つだった。どっちも欠点があるよ。手島さんにも欠点があったし、私にもあります。そんなことはいいんだ。

この「愛」を受けとるこちらの場はなにか。さつきから申し上げているとおり、「平伏し」です。ぶつつぶれです。キリストの前に平伏す。神の前に平伏す。平伏しがなければ、この愛は受けとれない。十字架も聖霊も。こちら側の如何にかかわらず、

「全部、私は贖ったよ」

というのが、全的な贖いというのが、この十字架ですから。全部引き受けた。過去も現在も未来も、問題ない。これを本当に受けとつてごらんよ。これはもう、居ても立つてもいられない、ありがたくて。完全に平伏しです。平伏さないで、いい気になって、

「ああそうですか、十字架は贖いですか」

なんてのは、そんな呑気な世界じゃない。

平伏して、ぶつ倒れて、これを受けとる。だから、讃美の土台はぶつ倒れなんです。平伏しなんです。平伏しの魂が本当の讃美ができる。そして、神・キリストを讃えると、讃えながら力がくる。「讃美」というのは、何も讃美歌を歌うことばかりではない。生活そのものが讃美となる。讃美することは同時に生活で身証していることになる。身をもって証しすることになる。

もう、遠慮は要らないですよ、あなた方。どう思われてもいいから、水を割らずに本当のことを言う。キリストはちつとも水を割らずに仰つたからね。キリストの一番恐ろしい言葉は、

「汝ら、父の全き如く全かれ」

と。誰が全くなれるか。

「私に來なさい、私と一つになれば、神さまの完全性がお前の中に入ってくるぞ」と。完全性なんです。無雑の世界です。だから、楽しくてしょうがない。頑張る必要がない。どんなことがあっても、讃美なんです。くすぶつた顔してはダメです。クリスチャンはくすぶっていることではない。どんな辛いめにあつても、微笑^{ほほえ}んでいる。

●戦いの器

パウロは、そうかと思うと、もの凄く戦いの器です。エペソ書6章10節、

「¹⁰終に言わん、汝ら主に在りて其の大能の勢威^{いさお}に頼りて強かれ。¹¹悪魔の術^{てだて}



に向かいて立ち得んために、神の武具をもて鎧うべし。¹²我らは血肉と戦うにあらず、政治・権威、この世の暗黒を掌どるもの、天の処にある惡の靈と戦うなり。」(エペソ6・10～12)

地上の間違った政治、日本の政治はしょうがないよ。庶民を苦しめるような土地の暴騰でね。もう本当は革命が起きてもいい。そんなことを言うと言過激だけれども。

何しろ、もうこの境地に入ったら、「そうだろうか」なんて思わない。「……であろう」なんて日本語の口語訳の聖書は嫌いだよ、僕は。「……なり」と、未来のことでも現在のことでも、ピシヤツと言う。それが本当の信の世界です。

「祈りたることは聞かれたりとせよ」

だもの。根源では聞かれてある。治らなくなつていいんだよ。本当の世界では、その奥に、健やかなるものがある。それで勝っていく。

私は健診なんかしないんだ。キリストの力が来っていて、何が健診か。あなた方、心配してはダメだよ。御霊は肉体をグツと変えるから、構造を。凄いんだから。バイ菌なんか征服してしまう。霊核というのがある。

まあ、とにかく、キリストという方は大変な方だ。お釈迦さんはキリストにかなうものか。けなすんじゃないけれどもね。だから、

「主さまー」

と言つて平伏していく。

「¹³この故に神の武具を執れ、汝ら惡しき日に遭いて仇に立ちむかい、凡ての事を成就して立ち得んためなり。¹⁴汝ら立つに誠を帶として腰に結び、義を胸当として胸に当て、¹⁵平安の福音の備えを靴として足に穿け。¹⁶この他なお信仰の盾を執れ、之をもて惡しき者の凡ての火矢を消すことを得ん。¹⁷また救いの冑および御霊の劍、すなわち神の言を執れ。¹⁸常にさまざまの祈りと願いとをなし、御霊によりて祈り、また目を覺して凡ての聖徒のためにも願いて倦まざれ。¹⁹又わが口を開くとき、言を賜わり、憚らずして福音の奧義を示し、²⁰語るべき所を憚らず語り得るように、我がためにも祈れ、我はこの福音のために使者となりて鎖に繋がれたり。」(エペソ6・13～20)

「御霊の劍」、本当の劍は御霊だと言う。聖霊と言は一つです。霊言だから。畳みかけてパウロは言っているね。

●霊肉渾然一如

コリント前書13章の「愛」は、霊の愛、聖霊の愛だ。具体的には、愛は即ちキリストの愛と言つたつていい。

「¹⁴然らば如何にすべきか、我は霊をもて祈り、また心をもて祈らん。我は霊



をもて謳^{うた}い、また心をもて謳^{うた}わん。」(コリント前14・15)
一般に我々は「心」の世界だね。「心」という言葉は非常に広い。ある意味においては、全部を包含するような言葉ですけれども。榮西は

「心は大いなるかな」

と、凄いことを言っている。

心で本当に歌っていると、それが知らないうちに、今度は靈歌になる。靈歌的な質になる。そういうものは、決して分析できない。円還関係になっているから。「霊・魂・心・身」、全部これは、円還関係です。渾然^{こんぜん}として一つです。

渾然^{こんぜん}一体の讃美歌も、私はいつか作った。キリストの復活のところだ。召団讃歌A45の「霊肉渾然一如」という讃歌。これは復活のキリストのことで、ルカ伝24章に因んで、1986年8月2日の正午に作った。一高の「春爛漫の花の色」という歌調で歌う。全部で12節からできている。第12節、

12 噫^{あゐ}キリストの霊体よ！

旅路の果つるいつの日か

聖^{みくに}国に呼ばれ往くときは、

霊肉渾然一如なる

聖名^{みな}のゆえなるみ救ひに

聖名^{みな}讃^{たた}えつつ踊り入らむ！

とにかく、どのような事に遭いまして、本当に生活そのものが讃美である。キリストを讃える。讃えざるを得ない。何となれば、かく愛したもうが故に。それも、「聖名のために」だよ。こつちのためではない。聖名の栄光が現れるためです。

我々の生涯は、必ず天界に行きます。自己を立てることは肉、キリストを立てることが霊。魂がその角度になると、力がきてしょうがない。使徒たちの信仰の現実がそれだ。だから、

「この使徒たちの原始福音に帰れ」

という。普通のキリスト教ではいつまでたってもダメだ。アッシジのフランシスとか、ザビエルとか、彼らは本当に身証していった。

しかし、ルター、カル빈は、どうも新教の人は霊の次元でカトリックの一流の人にはちよつとかなわないような感じがする。まあ、どうだっていいよ。しかし、素晴らしい構造は持っているから。カトリックのヒアラルヒーは、宗教的な構造自体は感心しませんが、れどもね。法王を立ててどうのこうのと、たくさん階級的になっているでしょ。そんなものは要らない。キリスト直結です。人間の在り方は、それぞれだから、相対的な意味しかないんだ。ところが、

「相対の奥に本当に絶対の世界を持っているか」

ということが大事なんだ。お互いさま、相対だから。

まあ、この辺で、おしまいにします。

